

資料

## 朝鮮芸能に携わる在日コリアンのライフヒストリー 【技芸の研鑽・活動編】

猿 橋 順 子\*

本稿は、日本各地の朝鮮学校に学び、家庭や地域、学校での生活を通して音楽や舞踏に出会い、その精鋭集団といえる金剛山歌劇団で活躍し、退団後も音楽・舞踊活動を継続している 3 人の在日コリアン・パフォーミング・アーティストのライフヒストリー【技芸の研鑽・活動編】である。一般的に、ライフヒストリーはひとりひとりの来し方の語りを丁寧に記録していくものであるが、今回は、同時代を共に過ごした三者の物語を横断的に読む意義があると考え、編集上の工夫をした。紙幅の関係もあり、三者の語りについて、幼少期から現在までの芸能活動をまとめた【技芸の研鑽・活動編】と、朝鮮語継承をはじめとする言語とコミュニケーションに関連する語りをまとめた【言語・コミュニケーション編】に分けることとした。なお、冒頭のプロフィール文は両編とも同一の文章を掲載している。

金剛山歌劇団は、東京都小平市に拠点を置き、主に朝鮮民主主義人民共和国を発祥とする舞台芸術公演を日本各地で行う総合アーティスト集団である。1955 年に「在日朝鮮中央芸術団」として結成され、1974 年に「金剛山歌劇団」と名称を改め現在に至る<sup>1)</sup>。活動の歴史は長いが、演者の生い立ちや思いについて日本語で記録されたものは管見の限りあまり見当たらない。

\* 青山学院大学国際政治経済学部教授

1) 金剛山歌劇団公式 HP 参照 (<https://kongozan-ot.com/>)

3人の語り手は、1970年代後半に関西（京都）、四国（愛媛）、首都圏（東京）で育ち、それぞれの地で朝鮮学校に学び、それぞれの在日コリアン・コミュニティの中で朝鮮の音楽や舞踏に出会い、技芸の研鑽および公演活動のために朝鮮半島と日本を行き来しながら活動を継続している。師匠や先輩から受け継いだ技や思いを、演者・奏者としてはもとより、指導者として後輩をはじめ、国籍を問わず関心を寄せてくれる人びとに伝えている。また、親として次の世代に受け継ぐべきことについて試行錯誤している子育て世代でもある。こうした、各人の幼少期から現在までのパフォーマンス・アーティストとしての足跡を【技芸の研鑽・活動編】にまとめた。

インタビューは、世界中がコロナ禍に苦しむ2021年8月に実施した。コロナ禍は誰にとっても生活様式の変容を迫るものであったが、とりわけ舞台芸術に携わる多くの人びとにとって、活動の継続のみならず生計の維持そのものが困難に見舞われた。特に、外国発祥の芸能に従事する人びとにとっては、国境封鎖が大きな制約となった。そのため、この記録はコロナ禍の舞台芸術従事者の活動や心情についての記録という意義も含まれる。

なお、インタビューは筆者が取り組む「多言語社会日本の言語コミュニケーション管理に関するインタビュー調査」の一部に位置づけ青山学院大学「人を対象とする研究」の審査を受け承認を得た（青19-32）。口頭および書面で研究の趣旨を説明した上で、「調査参加への同意書」を二通作成し交わした。また、日本言語政策学会特定課題研究の助成を受け、インタビューは猿橋順子（青山学院大学・研究代表者）、飯野公一（早稲田大学）、境一三（慶應義塾大学）、高民定（千葉大学）の4名で行った。新型コロナウイルス感染症予防の観点からオンライン会議アプリ Zoom を用いて実施した。なお、調査参加者の名前については参加者と協議の上、同意書を交わした上で実名掲載としている。

## 宋栄淑（ソンヨンスク）さん

1975年、京都府に生まれ育つ。在日コリアン三世。父方の祖父母は濟州島の出身。幼稚園から高校まで朝鮮学校で学ぶ。1994年、金剛山歌劇団に入団。朝鮮舞踊のソリストとして23年間活躍。団員の舞踊家と結婚。2017年退団。現在は朝鮮舞踊の舞踊家および指導者。自らの怪我を克服する過程で開発した Revive エクササイズ のトレーナーとしても広く活動している。二児の母である。

（インタビュー実施日：2021年8月9日）

——ご専門の朝鮮舞踊を初めての方にお話するようにご説明いただけますか。

宋栄淑：初めて見られる方には、「韓国の伝統舞踊が根っこにありまして、そこからモダンバレエ、西洋の要素を取り入れ舞台化された踊りです」と説明しています。韓国舞踊を素地に体系化して、舞踊劇も作れるものに仕上げたのが朝鮮舞踊です。崔承喜<sup>2)</sup> という朝鮮半島から日本に渡って、モダンバレエの石井漠先生に弟子入りされて、日本でも一時期CMなどによく出ていた方ですが、舞踊家として世界中で活躍されました。その方が平壤に渡られて舞踊を一から体系化して作られたのが今の朝鮮舞踊のスタートです。ですから歴史的にはそれほど古くはありません。

——ありがとうございます。では、栄淑さんが朝鮮舞踊に出会って、踊りの世界に入っていった経緯を教えてくださいませんか。

宋栄淑：私の祖父母は濟州島出身の在日一世です。私は京都生まれ京都市の在日コリアン三世です。小さい頃、ハラボジ（祖父）がチャンゴという韓国の楽器を叩いて歌って、それに合わせて私は楽しく踊っていました。幼

---

2) 朝鮮語読みはチェ・スンヒ（1911-1969）。1926年渡日。1930年代以降、「半島の舞姫」や「朝鮮の舞姫」と称され、アジアから欧米まで広く世界巡演を行う。戦後は朝鮮民主主義人民共和国に渡る。

稚園の年長から朝鮮学校に通い、8歳から朝鮮舞踊を習いました。最初は楽しく踊っていましたが、年に1回全国大会というコンクールがありまして、学生でも熾烈な戦いをするんです。夏休みはもちろん、学校がある日はほぼ毎日朝練という生活です。舞踊のために学校に行っている感覚でした。高校に入ると、オーディションを受けて3年間、夏の間、平壤で留学生として学びました。音楽大学に「通信生」（短期留学生）として在籍し、1カ月間まるまる練習に明け暮れました。実は高校生の時は広く世界を見たいと思って、スチュワードスになる夢をもっていたのですが、金剛山歌劇団の舞台を京都で見たときに、初めて見たわけではないのに、とても踊りが素晴らしい方がいらして私の中にズドンと来たんです。「これが朝鮮舞踊か」と。しびれるぐらい格好良くて、そこからコロッと夢が変わって金剛山歌劇団を受けると決めました。

——金剛山歌劇団の公演を観たことがきっかけだったのですね。

宋栄淑：18歳の時、金剛山歌劇団のオーディションに受かり、入団しました。

入団して6年目に平壤のコンクールで「1位のない2位」をいただきました。そこから金剛山歌劇団のソリストとして、平壤、ソウル、釜山、全州で公演したり、ユンドヒョンバンドとコラボしたり、政治がいい時期に韓国でもたくさん公演経験を積ませていただきました。日本も全国津々浦々回りながら。結婚後、2人の子どもを出産して、後輩を育てながら、自分も活動しながら、創作しながら23年間続け、4年前に退団しました。

今はソロで活動しています。20年前、私が膝を壊した時に助けてくださったユニバーサルアーツ（オステオパシー療法）の渡邊先生との出会いで今があります。正しく歩けない人は正しく踊れないということで、ウォーキングのレッスンを受けながらリハビリをしました。それまでは毎日痛み止めを飲み、打ちながらのレッスンでした。私の基礎のやり方が間違っていたのです。そこで基礎練習を見直して、今は学生や一般の方々にも朝鮮舞踊だけでなく、ピラティスや自力整体、朝鮮舞踊の呼吸法を取り入れながら、よりよく細胞をよみがえらせるエクササイズを指導しています。

——入団6年目のコンクールについてもう少し詳しく教えていただけますか。

宋栄淑：金剛山歌劇団の選拔を受け、そこで選ばれると、コンクールに向けて平壤でトップクラスの先生が付いてくださいます。そこで課題曲2曲と創作2曲を踊ります。寝ても覚めても練習です。私たちが在日コリアンはホテル暮らしで、練習場からなにからすべて準備してくれます。国がサポートしてくれました。

——創作も金剛山歌劇団でなさっていたということですか。

宋栄淑：コンクールの創作は平壤の先生がしてくださいました。崔承喜先生のお弟子さんだった方で素晴らしい舞踊家です。全身全霊で教えてくださる先生との日々は幸せでした。感謝しかありません。

——課題を与えられてそれに決められた型でやるのと、創作したり、ご自身でアレンジして踊るのはどちらがお好きですか。

宋栄淑：先生が作ってくださった創作曲を、私にしかできない表現で踊るということが好きです。朝鮮でたくさんのことを教えていただきましたが、北朝鮮にいる芸術家や舞踊家の方々が「うらやましい」と言ってくださることもありました。日本にいるからこそ韓国の舞踊も見られるし、世界の舞踊が見られる。いろんな感性やセンスを取り入れられる。どうしても北朝鮮にいると外をあまり見るできません。そこにしかない味もあり、私たちは真似できないですけど、あちらも私たちを真似できないのです。それが今の私のアイデンティティ。日本に在日として生まれて育ってきた環境だからこそできる芸術だと思っています。

若い頃は、私たちは身体ひとつ行くだけで、食事からレッスンからすべての面倒を見てくださったので、恩恵を受けた分、応えなくてはいけないとか、簡単に辞めるとは言えないといったプレッシャーもありました。でも、今はもっと素直に「踊ることが好き」と言えるようになってきました。

——コンクールで入賞されたことで在日の舞踊家として一人前になったという実感を得られたということもありますか。

宋栄淑：私より素晴らしく上手な舞踊家は沢山いらっしゃいますし、コンクー

ルはその年の出場メンバーにもよりますから運も味方してくれたことでした。コンクールで結果が出た時には、とても嬉しかったんですけど、舞踊家としてはゼロになりました。ここからがスタートってなったんです。厳しいレッスンを経て、コンクールを経験して、自分の中の究極を24歳で味わって、そこでゼロになってスタートした感じです。目の前のことを必死に表現する、言われたことをひたすら表現している私。

そこから30歳になる前ぐらいですかね。『未来へ』という、在日の1世の歴史を和太鼓とチャンゴとコムンゴと朝鮮舞踊でやりました。その時にこれは在日の感性だから、私にしかできないと。和太鼓とほとんど即興で踊ったんですけど、韓国の舞踊家にも朝鮮の舞踊家にもできない。そこからですね。ブレイクダンスとコラボしたり、バレエとコラボしたり、日本の三味線、琴、バイオリン、その他の弦楽器。日本の国立劇場で日本舞踊とコラボしたときも、朝鮮舞踊をご存知ない方がいっぱいいて。在日として朝鮮舞踊をもっと広めていきたいという思いを強くしました。

——他ジャンルとコラボレーションする時の面白さを教えていただけますか。

宋栄淑：日本舞踊とコラボした作品は『天女と傀儡師（クグツシ）』という40分の舞踊劇でした。ルンヒャンさんという在日のシンガーソングライターが曲を作り、朝鮮舞踊は私が創作を担当したのですが、その台本を見たときに、どうしても気になるところがありました。天女が傀儡師を見下す怖い存在で描かれていて。私は天女って万人を包み込む愛を持った存在。

——天女像が違ったということですね。

宋栄淑：はい。朝鮮舞踊に『金剛仙女』という木こりと天女のお話がありまして、金剛山歌劇団の天女のイメージを崩したくないというのがあったんです。夢を壊したくなくて、美しい天女で表現したかったんです。台本をひっくり返すといつてもないことをしてしまったんですけど、結局「そうしましょう」となりました。舞踊については、日本舞踊と朝鮮舞踊では、呼吸の使い方がまず違います。呼吸の落とし方やつなげ方、体の使い方、空間の使い方。でも、ジャンルを突き抜けた人というか、そういう

人たちでつながる呼吸ってあるんです。歌も楽器も。そういう人とコラボすると、ジャンルは違っても合わせやすい。阿吽の呼吸で合ってしまいます。——コロナ禍をどう過ごしていらっしゃいますか。

宋栄淑：最初の3ヶ月は教室もすべてストップになって3ヶ月ずっと家に居ました。6月ぐらいから Zoom レッスンを始めました。このままだと舞踊教室の子たち、ずっと家に居て駄目だなと思って。エクササイズとしてピラティスをしたり、瞑想したり、いろんなことができて、私はそのときに画面越しですけど子どもたちとすごくコミュニケーションがとれました。仕事はないし経済的にはどうしようって感じでしたけど、時間を有効に使うと思いました。朝鮮舞踊を教えている先生たちともつながっているのでも「朝鮮舞踊に質問ありますか」って投げかけたらたくさん質問が来て。コロナを乗り切ろうということで、岡山、広島、北海道を Zoom でつないで無料レッスンをしたんです。そういうことって今まであり得ない。コロナにならなければ考えもしなかったことです。誰かのために、という思いも余裕もなかったし、湧き出なかったと思うんですけど、こんな大変な中、朝鮮舞踊で愛をもらった分、愛で貢献したいなと思ってしたことがそれだったので、とても楽しかったです。

——前向きに取り組む秘訣はありますか。

宋栄淑：私は若い頃は結構自分を責めてしまうタイプだったんです。もっといい踊りがしたい。もっと上を目指したい。となると、ここが駄目、あそこが駄目、昨日これだけ練習したけど今日はもっと練習しなくちゃって自分を追い込むタイプだったんです。いろんな経験をしたり、自己啓発本を読んだり、そういうことを繰り返しながら今があります。それから、私はおばあちゃんに育てられて、おばあちゃん子なんです。めったに相談はしないんですけど何かあったときにいただく言葉に支えられている気がします。

——どんな言葉ですか。今、思い出せる言葉を教えていただけますか。

宋栄淑：平壤のコンクール出場に抜擢されたときに、最初は絶対嫌だと思ったんです。今までトップの方が行かれていたのに、こんなレベルの低い私が

そんな大きなコンクールに行けるはずがないと。京都に電話して、「出たくない、辞めたい」って24歳の私が相談したら、「ヨンちゃん、川がそうやって流れているときに、川の流れに背いたらあかんで。チャレンジしてあかんかったときはもういいやん。大きい流れが来ているときには乗りなさい」と言われました。その言葉は私の中で今もパターンを作り出していると思います。

——今後の目標をお聞かせください。

宋栄淑：バレエだったらバレエ公演、ミュージカルだったらミュージカルですけど、そこに朝鮮舞踊や韓国舞踊、ヒップホップも普通に入る。そういう普遍的な芸術になっていけばいいなと思います。演出の仕方ですとできます。当たり前を当たり前でなくす。ただやるだけでは意味がないので、受け入れられる世界観というか、そういう道も目指したいなと思います。そうすればもっと朝鮮舞踊をやる子が増えます。朝鮮学校の人数もすごく少なくなってきた、私はそれがすごくさみしいんです。フラダンスはスポーツジムに入っていますよね。ベリーダンスも。そういう感じにコリアンダンスを私は入れたいです。健康にもいいので。踊りが生活に取り入れられると、ただのエクササイズではなくて表現するということになっていくと思います。自分を出す。心が解放されて多幸福感が味わえます。幸せなんですけれどそれに気付いていない人もいます。特に子どもたち、学生、これから未来を担う子たちに伝えていきたい。若い子が身体の軸をしっかりせず内股で階段を上っているのを見ると、後ろから直したくなります。それでは子宮が垂れる。歩き方ひとつで変わるんです。骨盤がぐっと締まって、健康な体になる。小学生に紹介したいですね。いじめとかも少なくなると思います。日本の学校だからとか、朝鮮学校だからとかっていうのはないんですけど、それもコミュニケーションじゃないですかね。結局心の隙間、自分に対して自己肯定感が低い子がいじめる。どんな自分も丸だよというのをエクササイズや呼吸法を通して伝えてあげたいなっていうのはあります。やりたいこと、いっぱいですね。



## 宋明花（ソンミョンファ）さん

1976年、愛媛県に生まれ育つ。在日コリアン三世。父方の祖父母は濟州島の出身。小学校から高校まで朝鮮学校で学ぶ。1995年、金剛山歌劇団に入団。民謡のソリストとして21年間活躍し、声楽部長を務める。団員の演奏家と結婚。2016年に退団。現在は宋明花民謡教室主宰、西道民謡を中心にカヤグム（伽耶琴）ピョンチャン（弾き語り）などの公演活動、ボイストレーニング、教授法指導など活動の幅を広げている。一児の母である。

（インタビュー実施日：2021年8月4日）

——ご自身の芸能活動を含め自己紹介をお願いします。

宋明花：祖父が濟州島から日本に渡ってきまして父が1951年に愛媛で生まれ、私が1976年に生まれました。私は在日3世になります。

朝鮮半島は今は2つに分かれてしまっていますが、平壤の西側、黄海道（ファンヘッド）、平安道（ピョンアンド）あたりの民謡が専門です。日本側の江原道（カンウォンド）の民謡も習いました。そこから北に行くともた少し節が違います。

1930年代以降に作られた民謡を新民謡、それ以前のは古い民謡と区別されています。新民謡はだいたい作曲家、作詞家が分かっている民謡です。私は高校時代から平壤の音楽大学で朝鮮民謡を習い始めたのですが、そのとき習ったものはほとんど新民謡です。高校を卒業して金剛山歌劇団に入り、プロの歌手になってからも主に新民謡を歌っていました。金剛山歌劇団は21年間お世話になり、40歳を機に卒業させていただきました。今はフリーの民謡歌手として公演活動に取り組んでいます。最近では日本の劇団の方々が朝鮮半島の民謡を元にオペレッタ児童演劇をやっています、私と主人も参加して、私はカヤグム（伽耶琴）で伴奏しながらコーラ

スとして熱唱しています。主人は朝鮮の打楽器と吹く楽器全般をやっております。私の民謡教室では朝鮮民謡だけでなくボイストレーニングも教えています。

—さかのぼって小さい頃のお話からお聞きしていきたいと思います。家庭の中に朝鮮の音楽はありましたか。それとも朝鮮学校に入って初めて触れたのでしょうか。

宋明花：父も母も歌が好きで、音楽は車の中でよくカセットテープで聞いていました。それは日本の昭和歌謡も含め、韓国民謡と呼ばれるようなもの、あと韓国で歌われているトロット、演歌みたいな曲。あと同胞の宴会があるとBGMで流れているのが平壤の芸術団の朝鮮民謡とかでした。花見などに行くと流れていたもので自然と聞いていたと思います。

私が小学校（朝鮮学校）に入る前に、平壤の芸術団の第1弾が来日したんです。4回来たのですが私は2回目と3回目を生で見ました。朝鮮語の抑揚もすてき、声もすてき、顔も衣装もかわいい。朝鮮の舞台芸術に生でどんと触れまして、心を奪われました。ビデオを入手して毎日見ました。母に「なんで私は平壤で生まれなかったの」って泣いて言うぐらい好きでした。

—好きな歌がトレーニングのような発想に変わっていくのは、何かきっかけがあったのですか。

宋明花：やはり高校で平壤の音楽大学に通信の入学をしたのがきっかけだと思います。夏休みを利用して40日間ほど滞在します。3年間行きました。高校1年と3年の年は男性の先生に習ったんですけども、2年のときに女性の先生が付いてくださって。そのときに、やはり模倣は大事ですね。同じ女性だからか、こんな感じというのが分かりました。男性の先生から私が感じたのは力で歌う印象。突き詰めていくと全然そんなことはないんですけども、ボリュームもあって力強いので力が要ると思ってしまったんです。2年の時に女性らしい柔らかい声の持っていき方っていうのを目の前で聞いて、すぐに真似することができました。それを土台に3年で学ん

なので、2年、3年とすごく伸びたと思います。つかんだものが多かった  
です。

——この道でやっていくという決意の瞬間はありましたか。

宋明花：高校を卒業する頃、歌を歌う職業に就ければいいなど父に相談しまし  
たら「民謡歌手として活動するのであれば金剛山歌劇団だよ」というアド  
バイスをいただいて、オーディションを受けると運よく受かりまして、始  
まってしまいました。

——金剛山歌劇団に入るということは、そこから東京で暮らし始めるというこ  
とですよ。何が一番衝撃的でしたか。

宋明花：東京で暮らすというより、プロとして活動することについて何も分か  
っていなかったことです。初日に、「これは場違いなところに来てしまっ  
た」と思いました。皆さんの声で自分の声が少しも聞こえない。これは大  
変なことをしてしまったと思いました。そこから無我夢中で練習しました。  
舞台があり課題が常にあるので、それをクリアしている間に21年が過ぎ  
たという感じです。私は常に「歌が小さい、こぢんまりしている」と言わ  
れていました。ボリュームの出し方が全然分からない。体の使い方も分か  
らなくて、自分だけで歌っているという感じでした。表現の部分ではまっ  
たく経験がなくて乏しい。歌劇団に民謡歌手が少なかったので、いきなり  
1人で舞台に立つ機会がありまして、人に何かを伝えるということをあま  
り考えたことがなかったので、舞台に立って自分がすっからかんだとすぐ  
に気付いたんです。そこから、この「すっからかん」の正体は何だろうと。  
歌の背景を知らなかったり、自分の中身が足りなかったり、精神世界が浅  
かったり。皆さんは溢れるぐらいぱんぱんです。先輩に相談しました  
ところ、「ソヘグムを演奏する方々が1音1音、ああでもない、こうでも  
ないと、1つずつ音を作っていくように歌も作らなきゃいけないよ」って  
教えてくださって。そういうアドバイスを、いくつも、いつまでも引き出  
しにしまいながら、もしかしたらこういうことかな、ああいうことかなと、  
常に探し続ける感じです。4年目くらいかな、常に録音はチェックしてい

たんですけども、ある日ふと高校3年生のときの平壤でやった卒業公演を聞いて、こっちのほうがうまいと思ひまして。自分が追い求めれば追求めるほどどんどん小さくなって、どんどん感情がなくなっていく時期もありましたね。自分を一旦見失いました。

——金剛山歌劇団では決められた枠があるのですか。また、それは平壤の歌劇団をお手本にされているのですか。

宋明花：まず、金剛山歌劇団の制作チームの大きな枠で言うと、朝鮮のものを伝える演目と、あとは在日の方々の心境を歌った歌や表現した踊りと、あとサービス曲として日本の歌を歌ったり、外国の音楽をやったりとか、その3つをバランスよく組み込みます。

民謡歌手の私、個人の思いとしては、私が金剛山歌劇団に入った頃は、朝鮮で歌われている民謡のキーがとても高かったんですね。音がなくてキンキンしているので、「私は好きじゃない」と言う同胞の声をよく聞きました。私はどちらも好きだったんですけど、「私は韓国民謡のような、地声のかっこいい感じ、泥臭い感じが好きよ」って言う同胞の方々も多くて。どうやら私の民謡は、私がオペラの訓練をあまり受けていなかったからかもしれない、地声を残した、やや自然な歌い方をしていたみたいで、そのままの声で民謡を歌ったら「あなたの民謡は好きよ」って言ってくださる方々がいて。この違いは何なのだろうと考えました。朝鮮は分断されてからとても長い年月が経っていますので、朝鮮で歌われている民謡はきっと中国の影響を受けてキーが高くなり、韓国のもはもっと泥臭いような、両極端に発展したのではないかなと思ひました。分断される前はもっと似ていたんじゃないかなと考えていた時に、1900年代初期のレコードを入手して音源を聞くことができたんです。どっちがどっちか分からないぐらい似ているんです。もちろん東北民謡とその下の方の民謡の違いぐらいはありますけど、やっぱりそうかと、私はここを目指したいと思ひました。なので、今の朝鮮民謡はこのぐらい（上の方）のキーで歌っているけど、私は少し下げて歌いたいなど。入団した頃はこの（上の）キーで歌わ

なければいけないと思っていたので一生懸命頑張っていましたけど、ここ（下げた方）を目指したら、私が聞きやすい、歌いやすいってことは皆さんも聞きやすいはずではないかな、と思って。そこから朝鮮で歌われている民謡はクラシカルでピアノに合わせてとか、大楽団で歌うことが多かったんですけど、12弦のカヤグムでももとは伴奏していたり、チャンゴ1本で歌っていたはずなので、それで練習していけば、きっとそうになっていくはずだと目標を定めて練習をしました。そういうことを常に考えて、意識しながら歌うようにしています。

——先生に教えてもらうというより、自ら探し求めていく道のりなのですね。

宋明花：韓国の伝統音楽を習う方は、韓国に行って直接先生の家泊まってお弟子さんとして生活をしながら習ったという経験を聞きます。私にそれができる根性があったかは別として、そういうことをやってみたかっと思います。平壤にモランボンという峰がありましてとても景色がきれいなところです。その一帯で花見の時期になると、隠れ名歌手、一般の人民なんですけどもとても民謡が上手な方々がいて、そこらじゅうで歌っているというお話を聞きました。その歌を直接聞いてみたかった。私は現地のものを肌で感じてというより、きれいにまとまったものを先生方から習ったので。ですが、そこの暮らしに息づく民謡を習いたいという思いは私の欲なので、自分が今、ここでできることをやっていきたいと思っています。

——ご自身のそういう経験から、後輩達にアドバイスすることもありますか。

宋明花：私のところにレッスンに来てくれる方々はさまざまで、一番下は私の姪っ子で5歳です。幼い子には理論的なことはいらなくてイメージだけ伝える。私の声を真似てもらうことになるので、私自身が分かりやすく歌えなきゃいけない。少しずつ分かってくると「このニウン（ㄴ：パッチム）の音をもうちょっと長めにしてみようか」とか、そういうふうにできます。朝鮮語が堪能な方でしたら、好きな歌を好きなだけ歌う。私はポイントだけお伝えする感じになります。ただ、歌劇団の後輩たち、それを職業としてとなるとちょっと妥協できない。他を妥協しているという意味で

はなくて、表現の域までいくためのお手伝いになることは全部教えます。迷路に迷ってしまわないように。迷うのが一番苦しい。足りないものを追いつく求める時は楽しいですけど、一生懸命やっているのに空回りしてしまうと苦しいと知っていますので。

——今コロナ禍で舞台関係、特に生演奏をメインで活動されている方にとっては大変な状況だと思いますが、どのように過ごされていますか。

宋明花：去年（2020年）の4月初旬に主人と2人でライブをやる予定がありました。公演がなくなって「さあどうしよう」と。私は、すぐ前向きに切り替えるほうです。時間ももったいない。そんな私もさすがに一時2週間ぐらい沈んでしまいました。そのとき、弟が「YouTubeに歌をアップしてみたら」と言ってくれました。「このままだとヌナ、姉ちゃん、歌やめちゃうかな」と思ったそうです。私が「そういうのは苦手」と言いましたら「人は、あの人、自分の歌をYouTubeにアップしてる、とか言うかもしれないけど、姉ちゃんは歌手だからね」と言われました。確かにそうだなと思って。これ、忙しかったら絶対にできないことです。公演で忙しい時は3曲ぐらいに絞って1年を通して3曲しか歌わないということになってしまいます。歌劇団にいと作品にするために歌い映える曲を選びがちになります。ですが埋もれている名曲がたくさんある。今だからできること。それらを紹介しようと思ってYouTubeを始めました。今も続けています。

——手応えを感じていますか？

宋明花：すごく反響があるわけではないですけど続けることが大事だと思っています。「こういう民謡があったんだ」とか、「懐かしい」というコメントをいただけると嬉しいなと思います。今は素朴に控えめに、という感じです。これまで、舞台上に立つ回数は多かったんですけど、自分がやってきたことがまだまだこの体の中に余っていることに気付きました。舞台では、常に生伴奏で100パーセント決めなくてはいけない。作品化しなくては、という思いから、縛られていた部分があったなと気付きました。それで、

いろいろな曲に挑戦して歌っています。金剛山歌劇団のあんな広い舞台に1人で立って「私、何したらいいんだろう」って途方に暮れた私。歌の精神世界、人に喜んでもらう歌、歌の世界をパフォーマンスとして表現することに悩み続けた私ですが、この民謡が大好きで、みんなに聞いてもらいたいから今ここに出てきた、というところに、やっと辿り着きました。

それから、YouTubeは全部を揃えて一曲一曲確実にしっかりしたものを  
出そうとするとすごく時間がかかるんです。弟が「YouTubeを続けるためには自分のマックスの40パーセントぐらいでいいんだよ」とアドバイスしてくれました。なので、40パーセントぐらいのつもりで、とりあえず私がやりたいこと、見聞きして溜めてきたものをアウトプットしようと思って。民謡ですからすべて朝鮮語ですけれど、この民謡の世界観は、もっと日本の方々に知ってほしいなと思ったら和訳をつけたり、意識で日本語の歌詞を作ってみたりとか、そういうのも選びながら。

金剛山歌劇団のお客さまには、日本の方もたくさんいらっしゃいます。朝鮮舞踊の人气が上がって、お客さまに日本の方々が増えた時期がありました。私が舞台で歌うのは朝鮮民謡だから、すべて朝鮮語なわけです。しかも時代は大昔。私がこれを歌って日本の方に何を伝えることができるんだろうって考えたことがあります。その状況が分かるように振りを付けてみるとか、いろんなことをやってみました。今、その、いろんなやり方をやってみる、で良かったんだと思っています。たとえば英語が分からなくても、ビートルズやカーペンターズの歌がずっと入ってきて、一緒に歌いたくなる、真似したくなるように、きっと私が朝鮮語の魅力的な抑揚でもって朝鮮民謡を余すことなく歌えていたら、そこに魅了される方もいらっしゃるだろうなって思えるようになりました。そうやって素直に考えればいいんだ、と。そういうことは教えてくれる方がいるわけではなく、私が漠然と思ひ悩み、追い求めていただけなので整理もされていなかったんですね。最近になって、今までのいろいろなことが整理されてきました。

## 河明樹（ハミヨンス）さん

1977年、新潟県長岡市生まれ東京育ち。在日コリアン四世。父方の曾祖父が1925年に全羅南道光州から渡日。小学校から高校まで朝鮮学校で学ぶ。朝鮮大学校卒業。ソヘグムの奏者として金剛山歌劇団に10年間所属。団員のソヘグム奏者と結婚。2006年退団。現在は、1965年創業の焼肉店の三代目オーナーシェフとして経営に取り組みながら、妻と共にソヘグムの演奏活動、指導にあっている。一児の父である。

（インタビュー実施日：2021年7月28日）

——自己紹介と明樹さんがソヘグムを始められたきっかけを教えてください。

河明樹：私は在日コリアン四世になります。曾祖父が1925年4月1日に韓国の全羅南道、光州から下関に上陸したという記録があります。私の先祖の日本での歴史がもうすぐ100年になります。私は1977年に、出生は母の実家がある新潟県長岡市ですが東京育ちです。家は今年（2021年）で創業56年目になる焼肉屋で、私が三代目です。子どもの頃から、歌うことが大好きで、親戚一同集まると子どもたちは歌って場を盛り上げる役割になるのですが、その中でも私は率先して歌って、トリを飾ったりしていました。小学校から大学まで朝鮮学校に通いました。朝鮮学校には日本の学校に吹奏楽部があるように民族楽器部があります。楽器は朝鮮から日本全国に送られまして、私の通った小学校にもちょうど届いた時期でした。小学校3年生から入部しまして、最初はチャンゴという両面太鼓を楽しく演奏していました。ソヘグムを弾ける先生がたまたま赴任していらっしゃって私のクラスの担任の先生になったんです。ある日、先生から「あなたはこの楽器をやりなさい」と、なかば強制的に楽器を渡された記憶があります。ソヘグムはオーケストラでいうとバイオリンのような、大人数で演



奏する楽器ですので、私を含めて学年で6人ぐらい選ばれました。今使っている楽器は、その先生が使っていた伝説の名器みたいな楽器なんです。朝鮮大学校を卒業後、金剛山歌劇団に入り10年間おりました。今も先生の教えを受け継いでソヘグム奏者をしています。

——小学生でソヘグムを渡されて、最初から抵抗なく取り組みましたか。

河明樹：最初は遊び感覚で楽しく取り組んでいました。小学5、6年生ぐらいから将来は「プロの演奏家になるぞ」と思いながら。周りの先輩たちがお正月になると演奏や歌を歌いに平壤に行っていた時代なので、自分も早く行きたいと思っていました。下は小学5年生から高校3年生まで、在日の子どもたちが200人の団体を組んで年越しコンサートに参加するんです。初めて行ったときは歌で参加しました。

——その時が、初めて踏む朝鮮半島ですか。

河明樹：はい。万景峰(マンボンギョン)号って聞いたことがあります、初代万景峰号と、その時期は三池淵(サムジヨン)号という2つの船が日本の新潟から朝鮮半島の元山まで2泊3日かけて行きます。明け方に着くのですが朝鮮って「朝が鮮やかな国」と書きます。歌にも「朝日がとても美しい国」という曲があります。それを習っていたので、船を降りる前の朝の景色が幻想的で、こんなに綺麗なんだと、歌に歌われているとおりの場所があるんだと感動したことを覚えています。それは鮮明な記憶です。

——そこからたびたび平壤に行かれることになるわけですね。

河明樹：高校1年生の時、オーディションを受け、夏休みの1カ月間、平壤音楽舞踊大学(現平壤音楽大学)に私たちは「通信教育」と呼びますが留学生のように滞在します。大学の教授、第一人者の先生たちに楽器の奏法と理論を習います。そこで向こうの音に触れます。楽器から出てくる音が、同じ楽器を弾いても何か音色が違うんです。そこにいると私もそういう音が出てくるんですが帰ってくると見事にその音が出せなくなってしまう。原因は、たとえば気候や湿度が違います。私のソヘグムは木の楽器ですので湿気が少ない方が鳴ります。あと、その国の言葉の発音によって楽器で

表現する幅も変わると思います。そんなふうの原因を色々考えながら研究しています。

家が焼肉屋ですが、祖父母が作った門外不出の味があります。私はおばあちゃんが作った焼肉の味を今でも覚えていまして、その味を今、私が受け継いでいます。入っているものはたいしたものではないのですが、その微妙な調合。ニンニクの濃さや醤油の辛さ、しょっぱさ。香りだったらごま油とか、それらの調和。ちょうどいい塩梅。それは受け継いできたもので経験していないと出せない。味も言葉も音色も通じていると思います。

——納得させられます。ソヘグムという楽器の特徴について教えてください。

河明樹：弦が4本の楽器で、歴史でいうとまだ50年程度です。朝鮮半島が南北に分かれた後に北で独自に開発されました。ですので、韓国にはあまり奏者がいません。北から渡った人が以前その楽器をやっていたということで最近注目を浴びました。朝鮮では演奏者が子どもから大人までプロ・アマ問わず2万人ぐらいいます。民族楽器の中では人口が多い方です。

元となったヘグムは紀元前からあったと言われていますが響きを司る箱の部分は穴が開いているだけで空洞になっています。バイオリンやチェロは箱をしっかりと作って、その中に魂柱という響きを増幅させる柱が立っていますが、ソヘグムにもそれが埋め込まれています。ですので、もとの楽器はあまり倍音が鳴らない。昔はコンサートホールがあったわけでもないです。それがバイオリンやチェロのように、より良い音、より良い見た目、より良い響き。音量が大きいだけではなくて、いろいろな音を鳴らし、響かせ、音がどんどん膨れ上がっていく。昔の哀愁を帯びた音色も出るけれど、その音色をどんどん増幅させるようにと改良が重ねられたんです。

——明樹さん自身はソヘグムでどのような表現を目指していच्छゃいますか。

河明樹：私はソヘグムを日本で習い、本国へ行って習い、両方の音が違うことに気付いて、本国の音を追い求めている私の音が日本発みたいいな感じで出ていると思います。同時に、日本にいると楽器が改良される前の2本弦

のヘグムにも触れることができます。草とか土の匂いがするような、ヘグムの音色を聞いた瞬間、ソヘグムは改良されたけど、こういう原型の音も求めていけないのかなと思う反面、弦が4本になったということはバイオリンなどを意識して弦が増えたということで、バイオリンのような存在を目指すこともできる。

今、私はバイオリンの弦を代用してスチール弦を使っていますが、もともとのヘグムは絹糸です。絹なので蚕です。自然の素材を使って出す音は、金属とは音色がまったく違います。どちらの音色も研究していくことで、どちらにも出せない第三の音を出せるのではないかと。たくさんの人が関わって、たくさんの思いが込められた楽器が、今、私の手元にあると思うと、私がやらなければならない使命というものを感じます。

——指導もされているんですか。

河明樹：はい。韓国にも弟子がいます。今コロナで行けませんが、その前までは北と南が分かれて連絡も取れない状況ですが、私が在日コリアンで両方行ける。平壤の第一人者の先生に習っている1人として韓国から呼ばれます。演奏する機会もたくさんいただきました。

——韓国で演奏や指導する意義はどのようなところにあるとお考えですか。

河明樹：韓国では基本的に、伝統のものは形を変えずに受け継いでいこうとしています。北ではロシアや中国の影響を受けながら、たとえばオーケストラの中のバイオリンが第1バイオリン10人、第2バイオリン10人いたとして、バイオリン奏者の中にソヘグムの上手な人がいたら、バイオリン10人、ソヘグム10人にしたりすることもあります。旋律を歌うにしても、民族楽器のほうが音色が哀愁を帯びていていいということでソヘグムが活躍し、激しい曲や高音の多い部分はバイオリンに任せるなど、楽団によって独自に取り入れながら音色を作っています。まさにその辺が、私にとってのメリットでもあるんです。韓国の演奏家と交流する場合、私がソヘグムを教えて、伝統的な楽器を弾いてる人たちからその音色を私が習う。お互いに物々交換で高め合える。交流を深めながら自分自身もレベルアップ

していきます。今まではそのような交流のしかたは難しい面もありました。伝統をしっかりと守ろうという韓国と、伝統を超えて、変えていく、発展させていく北とでは、相入れないところもありました。あと、韓国は地方によっても考え方が違います。儒教の精神が強く残っている土地の場合、私がソヘグムを演奏しに行っても、あちらの第一人者は私よりも何世代も年上の方たちなので、その方たちに受け入れていただくのは難しい面があります。今、私も年を重ねて、韓国で第一人者として頑張っている方たちと世代が近づいてきています。同じ立場で対等に話し合えるようになってきました。どう伝統楽器を受け継いでいくか。今、国の文化として守られているから安定していますが、知名度を高め、大衆に受け入れられるには変えなくてはならない面もあるのではないかと。そういう議論になった時に、まさに私のソヘグムという楽器が、伝統も守りながら広く受け入れられるように改良されてきた。それを韓国の方でも取り入れ方を検討しながら、私は私で韓国の伝統音楽をどんどん学ぶ。お互いがパワーアップできる方向で仲良くやっていく。喧嘩しても何も生まれません。守らなければならないということは大きなことですね。なくなるのは簡単です。一度失ったり、なくなってしまったものは、復活させることはとても難しいことだと思うので、みんなでしっかりと守っていきたいと思っています。

——日本でソヘグム奏者としてやっていく上での課題はありますか。

河明樹：なかなか広まらない、ということです。演奏を聞いていただければ喜んでもらえる楽器なのですが、外交レベルでいうと朝鮮と日本は完全に遮断されています。物から人から文化から、まったく交流がない中で、なかなか受け入れられない、広まっていけないことを若い頃から課題として考えています。私は好きだから続けていますが、若い世代がどうなっていくのか。私も子どもがいますが、日本が少子高齢化社会の中で在日コリアンの人口もどんどん減ってきています。学校の人数も、楽器をやる人数も少ない中、衰退の一途をたどっているということは、割と早い時期、20代の前半ぐらいから朝鮮学校の指導で全国を回っていて肌身で感じています。

どう広げていこうかという試行錯誤、悩みは尽きません。常に危機意識を持っています。守るとはどういうことか。狭い中で争ったら本当になくなってしまいます。争いで生まれるものは憎しみと怒りしかありません。お互いを尊重することが継続のための大きな力だと思っています。

——今でも全国の朝鮮学校を回って指導されているんですか。

河明樹：今は指導で学校を回るのはあまりできていません。全国からコンサートに呼ばれた時、その近くに朝鮮学校があれば訪れて子どもたちの前で演奏したり、楽器を演奏する子がいたらその場で教えてあげたりしています。今、演奏している生徒たちは、多いところなら20～30人いる学校もあります。東京以外ですと4～5人が部活動でやっているという状況です。その規模では、なかなか予算を立てて指導者を呼ぶということは学校側も難しい。

——コロナ禍の活動についてお聞かせ願えますか。

河明樹：オンラインレッスンも取り組んでいます。このインタビューの前も広島島の朝鮮学校の生徒達にZoomレッスンをしていました。このようなツールは、話はしやすいですが、楽器を教えるとなると音色がまったく伝わらないですね。演奏なら一瞬で伝えられるものが教えられない。若い人たちがやめてしまわないように、続けるために、エールを送ったり、姿勢を正してあげたり、話したりはできます。音色が届かなくても、届いているという前提で一緒に演奏したりしています。

——2020年の日韓交流おまつり（オンライン）で演奏を聴きました。

河明樹：ありがとうございます。あの『見上げてごらん夜の星を』に関しては、編曲してくださった方は在日の作曲家です。私が、日本と平壤、韓国を行ったり来たりしながら、音楽を通じていろんな人と会う中で編曲を依頼したんです。演奏していると平壤での出来事が思い出されます。懐かしさ。先生の思い出。そういうわけで、編曲していただいたのはだいぶ前だったんですけど、私にとって人前で演奏するには重たすぎる作品になっていました。去年コロナでみんなが重たい時期に「日韓のお祭りで何か

やってください」というお話をいただいた時に、日韓交流ならば日本の方たちも分かって韓国の人たちも分かって、私が日本、韓国、朝鮮という3つの文化を持っていますので、それらを融合できるいいタイミングだと思いました。つらい時。そのつらさは南北の分断もそうですし、コロナで行かれないということも含まれます。国によって良い面も悪い面もあります。ですが、人が住んでいますので、人とのつながりや縁の深さは、どの国に行ってもどの土地に行っても、人の温かさであったり思いやりであったり、人間的なつながりというものはどこにでもあるんです。ただ一つ、今なくて悲しいと思うのは、今世界中がこのようにオンラインでつながって、どこの人でも、誰とでも話せる世界なのですが、私は今、平壤の先生が元気なのかどうかも実は分からない。連絡したくてもできない。行かなければ会えないような、そういう世界が残っているのだということは、私の中では、早く自由に……

先ほど「使命」という言葉が出たのは、私が先生から言われたことと関係しています。先生は、若い頃、演奏でアルゼンチンやブラジルなど、世界中を回っていたような方なんです。今となってはそのような機会もなく、自由に演奏に出かけることもできない中、私たちと出会って、私たちが弟子入りさせていただきました。そして「君たちが育って、君たちが日本に帰れば世界中とつながっていけるだろうから、この素晴らしい音楽を、私が持っているものは全て教えてあげるから、あなたたちが持ち帰って受け継いで行ってほしい」という言葉をいただきました。あまりにも大きい言葉ですが、私たちはそういう立場にいる。私たちだからこそできることがあるのではないかと、という思いから「使命」という言葉を使いました。

『見上げてごらん夜の星を』は、実は先生の言葉、先生の思いに重なっています。演奏も先生の音色を意識して演奏しています。ですので、『見上げてごらん』は日本の歌なのですが、そこに私たちのいろんな思いが詰まったら、どういう『見上げてごらん』になるのかな。特にコロナ禍の今、世界中が大変な中、さまざまな心境がぶつかり合って、混ざり合って、

「まさに今の曲だ」と思って演奏させていただきました。

——思いのたくさん詰まった演奏だったんですね。

河明樹：はい。コロナ禍で演奏の機会はとても少なくなりましたが、ひとつ良かったことは時間をふんだんに使えます。今まで習ったものを総括しながら自分を磨くとてもいい機会で、修行僧が山ごもりしているような気分です。とにかく音色に取り組んでいます。ソヘグムの本来の音色はこうかな、先生はこうやって弾いていたのかなど。ひとつの音を思う存分追求しています。今、音楽家たちは「仕事がない」と言っている人が多いのですが、追求している人はコロナ禍が明けた後に差が出るだろうと思います。焼肉の味でたとえると「この肉めっちゃ美味しいよな」となっているか、「このお店いまいちだったな」となっているか。音楽も同じでやっぱりいい音楽はいい。追求している音、味も追求すると美味しくなるように、音楽も追求すれば追求するほど耳から伝わっていきます。体に振動しますから。味覚とは違いますが、音の美味しさっていうんですかね。そういうものがきっと違うだろうと自分に言い聞かせながらコロナ明けを楽しみにしています。

【謝辞】 インタビューにご参加くださった宋栄淑さん、宋明花さん、河明樹さんに心から感謝申し上げます。舞台活動や後進の育成について、10年後、20年後にまたお話を聞かせていただけますことを祈念しています。

